
藍より青く

佐伯チカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藍より青く

【コード】

N9489P

【作者名】

佐伯チカ

【あらすじ】

運命という過酷な現実に直面した二人は

現実とどう向き合っていくのか？

運命の概念を覆すべく流浪する二人

そして二人の出した結論とは？

彼方からのメール

何の変哲もない朝

そう 世界という時間の中では

何の変哲もない瞬間の羅列

その一瞬

「佑樹！」

「佑樹！」

「いい加減に 起きなさい！」

母はキレ気味に下の部屋から叫ぶ

「起きたよっ！もう！」

『白井 佑樹』

高校三年生

特技や趣味はこれといってない

最近はやりの ヒッキーだ

女子からは全く相手にされていない

決して外見に問題があるからではないと勝手に思っている

俺は女子には興味がない

だからクラスの女子と積極的には話をしない

そんな理由からだろう

「早くご飯食べないと また遅刻よ!」

母は機嫌が悪い

「はいはい」

階段を下りて 食卓に向かう

「おはようっ！ お兄ちゃん！」

妹の碧が嬉しそうに迎えてくれる

碧は高校一年生

俺と違って 頭が良く 進学校に通っている

趣味もバスケと俺とは正反対の健全少女だ

俺たち兄妹はまるで『恋人』のように仲が良い

こんな俺なのに慕ってくれる

大事な妹だ

早々に朝食を済ませ

制服に着替えて家を出る

学校まではチャリ通だ

20分ほど 空を眺めながら学校へと急ぐ

案の定 校門では教育指導の担任が待ち構えている

「し・ら・い く ! ! ! !」

「いい加減にしろよ!」

これもいつもの風景だ

滑り込むようにクラスへと入る

もちろん 後ろのドアからそつとだ

「はい!白井君!遅刻ね!」

担任の後藤先生が間髪入れず 大声で叫ぶ

それに反応してクラス中が爆笑する

「佑樹！シャツのボタンが！」

隣の席の優子がそつと声をかけてきた

よく見ると シャツのボタンが段違いだ

「ああ・・・ まあいいんじゃないあね？」

優子はあきれ顔で俺の顔を眺めている

「今日はまずは、マリリン・マンソンあたりから」

すぐさまiPodを取り出し ヘッドフォンをつける

日常は光の速度を超える錯覚さえ覚えるような速さで過ぎてゆく

5時限目も終わり ヘッドフォンをしたまま帰宅しよつとした時

隣の席の優子が話しかけてきた

『臼井優子』

可愛いのだが どこかつかみ所がない ふわふわした感じの女子

自分で言つのもなんだが 彼女は俺に気がある

と これまた勝手に思い込んでいる

にしても 名字が似ているせいでかなり迷惑しているのだ

彼女は『うすい』

俺は『しらい』

「 ても良い? 」

「 はあ? 」

ヘッドフォンを外すと 優子を見つめた

「 もうつ だから? ちょっと話せる? 」

「 あゝ・・・何? 」

ぶっきらぼうに答える

「じじじあ……」

「じゃあ 何処よ？ベッドの上ってか？」

「佑樹ってサイテイの変態！」

そう叫ぶと、優子は教室から出て行ってしまった。

「うむ…… ま いつか……」

さすがに気にはなったが

女子の心理に深く関わる気など持ち合わせていない

家に帰ると 早々に自分の部屋へ直行

妹の碧は まだ帰ってはいない

バスケの練習に夢中なのだろう

「ったり〜」

何をしたわけでもないが　これが俺の口癖らしい

ベッドに横たわりながら　携帯ゲームで時間を消化する

と　いきなりメール着信のバイブが手に響く

『 a o i 4 1 3 @ 』

「ん？」

「だれ？」

登録されているクラスの仲間ではないようだ

『私、貴方のことが好きです』

『一度、会ってもらえませんか？』

「ほづほづ！ 俺ってやつぱりモテるじゃん」

この時の俺はお気楽だった

しかし 彼女との接触から

俺の時間は大きく揺れ動くことになった

そうして始まる

生きていれば

嫌なことだってある

死にたくなるくらい

みんなそうして生きている

当たり前的事

俺の苦悩は お気楽な性格のおかげで

今までなかった

だから自分とは次元の違う場所で 起きている事のように思えていた

日曜の朝

テンションは高い

「どうしたの？お兄ちゃん！」

「なんか 嬉しそう」

妹に いきなり言い当てられる

『分かりやすすぎだろっ』

自分に怒ってみるが すぐに笑みがこぼれる

「じゃあ 行ってくるよ」

家を出て 待ち合わせ場所へ向かう

『待てよ！もしブスだったらどうしようっ…』

考えてもみなかった

それだけ舞い上がっていた

『アホだ 俺』

そんな事を考えているうちに 待ち合わせ場所に着いた

彼女はまだのようだ

といっても 誰が彼女なのか？ わからないんだけど

「しらいくん？」

背後から声がした

おそるおそる振り返る

『か、かわいい』

びびった 何も言えないどころか 震えてる

「ふふっ 写メと同じだあ」

冷や汗が 背中をつたう

必死になって声を出す

「なんで?」

『気がきかねえ ことば』

自分が情けなくなる

「わたし 白井 蒼」

「あ 同じクラスに お姉ちゃんが・・・」

「あゝ！」

ようやく話が繋がった

「優子の？」

「そう！」

なるほど

だから俺のことを知っていたんだ メアドも

『しかし 優子は俺に気があるはずなんだが』

こんな時でも思い上がれる俺って

「優子は知ってるの？」

落ち着いたところで 冷静に聞いてみる

「あんな人の話はやめて！」

急にムツとした表情になる

『仲が悪いのか』

気にはなつたが スルーした

すると突然 彼女が言い放った

「わたし あなたを永遠に愛するよ」

「どんなことがあっても」

俺は言葉を失った

「何故？」

唯一 浮かんだ言葉だった

こんな お気楽男でも あり得ない事くらい判る

彼女は笑って

「だって そう決めたから」

「そうしなきゃ・・・」

「そうしなきゃ いけないの！」

俺の背中に 再び 冷や汗が流れた

告白

愛されることが幸せなのか

愛することが幸せなのか

そんな事を考えるようになっていた

「おはようっ！」

優子だ

『気まずい』

妹との件は知っているんだろうか？

聞きたくても 聞けない

それに 何故 彼女は あそこまで言い切れたのか？

真実を知りたい気持ちと

聞くのが怖い気持ち

どっちも選べないから 優柔不断なのだ

「どうかした？」

優子が心配そうに 顔を見つめる

なんか変だ

今まで 何にも気にしなかった優子のそんな仕草が

妙に ドキドキ する

「ねえ いつでも良いから時間とれない？」

優子が不意を突く

「前から 言ってるでしょ」

怒られているような気分だ

まるで 妹とデートしたことを責められているような

知るはずもない と信じただけなのだが

「あ ああ いいよ いつ？」

少し声が震えていた

「うーん じゃあ 今週末！」

「わかった」

俺は優子を意識している

何故だろう？

あんなに ウザい と思っていたのに

妹の 『蒼』

彼女の存在からなんだろうか？

週末 俺は優子と会った

優子は真っ白なコートを着て どこからみても上品なお嬢様

俺は汚いジーンズに革ジャン

どう見ても お嬢様につきまとうチンピラだ

「ねえ 妹と会った？」

いきなり ノーガードの顔面にストレートパンチがヒットした

「あ いや 知らなくて・・・」

しどろもどろ

「違うの 責めているんじゃないわ」

「なんて言うか」

今度は優子が しどろもどろだ

沈黙

「あの子 本当の妹じゃないの!」

「え!?!」

「父が 他の女の人に生ませたっていうか」

「腹違い っていうの?」

「だから なにを考えているかわからない所があって」

俺は 理解する 思考回路がストップしていた

「だから何よ」

おねえ言葉になってるし・・・

「要するに 気をつけてほしいの あの子には!」

そう言つと 優子は顔を伏せた

「なんで そんな事 お前が心配すんだよ」

優子は俯きながら か細い声で言った

「わかっているくせに!」

「いじわる」

俺は事態が把握出来ずにいた

わかったのは 優子とその腹違いの妹に好意を持たれている

それだけだった

でも 腹違い って

じゃあ 彼女の本当のお母さんは?

家に帰ると 妹の碧が出迎えてくれた

「お兄ちゃん 最近 モテモテじゃ〜ん」

こいつも どこかの男に恋して ずっと好きです
とか言っているのだろうか？

あ！

彼女もうちの妹と同じ名前だな 字は違うけど

単なる偶然にしては 良くできている

「なに？人の顔じーつと見つめて」

「私のこと 好きなんでしょ」

碧は無邪気に 笑いながら そう言った

「ああ 妹だもん 何より大切さ」

「マジでかえさないでよ〜 照れる〜」

そうさ

他人より身内が大切に決まってる

どんな愛した人より

この時の俺は そう信じていた

お詫び

随分とご無沙汰をしてしまいました

書き始めて 暫くして あの震災がありました

直接の被害は無かったのですが

大切な 友人 恩師 失いました

多くの方が 同じような想いを していると思います

私は無力でした

何も出来ませんでした

そして 今でも 引きずって生きています

老人たちは 祖先の想いを大切にしなさいと言います

そして 先祖代々のお墓を守り 感謝を忘れないようにと

私は思います

祖先 亡き両親 祖父母

果たして 自分たちを忘れないことを望んでいるのかと

きつと きつと 思っているのは

「今を生き 明日に繋いでいくこと」

私たち 生きているものは そんな想いに 生かされているのだと

だから 生きようと思えます

明日を 少しでも 明るくするために

「藍より青く」は中途半端な話になってしまいました
誠に申し訳ありません

心機一転 近日 新しい命で 物語を書いてみよう
と思っています

ごめんなさい そして ありがとう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9489p/>

藍より青く

2011年10月6日17時22分発行